

## 令和6年度 卒業式式辞

凜とした雰囲気の中で、今まさに旅立ちを迎えた卒業生の醸し出す清々しさが大変心地よく感じられます。寒さの残るこの会場ですが、温かい祝福と見守りの心に満ち溢れています。この佳き日に、愛知県議会議員石井芳樹様を始めとする多くのご来賓の皆様ならびに保護者の皆様のご臨席を賜り、長久手小学校第78回卒業証書授業式を挙行できますことを心よりうれしく思います。

さて、99名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。私はあなたたちが3年生のときから4年間、長久手小学校での生活をともに過ごしてきました。特に、この1年間は、100年を超える永き伝統と輝かしい実績のある長久手小学校を、最高学年としての自覚と責任をもってしっかりと支えてくれました。そんな誇りに思えるあなたたち一人一人に、先ほど、小学校6年間の価値ある学びと健やかなる成長の証である卒業証書を手渡しました。その卒業証書には、あなたたちがここで培った経験や友と過ごした思い出の日々が刻まれていますので、大切に保管してほしいと思います。

これまで朝会や各種行事のたびに、たくさんのお話をしてきましたが、あなたたちに話をする最後の機会になりました。長久手小学校に入学したあなたたちに、卒業の別れがあるように、始まったものには、必ず終わりがあります。永遠というものはないのです。人生もまたそうです。ふだんはあまり意識しないのですが、人は皆、限られた命を割り当てられて生きているのです。

横浜にある病院のホスピス病棟で勤めていた小澤竹俊さんという方がいます。ホスピスというのは、治る見込みの乏しい末期がんなどの患者の苦痛や死に対する恐怖を和らげ、少しでも人間らしく安らかな最後を迎えるケアをする医療です。小澤さんは、死を迎える患者と向き合う中で、いのちとは何か、生きるということはどういうことかを考え続けてきました。小澤さんが患者から学んだことは、「人はたとえ苦しくても、その苦しみから学ぶ可能性をもっている」ということだそうです。その限られた命と知った患者が学んだことは、仲間との友情や信頼であったり、家族の愛情であったり、そういう目には見えないものの大切さだったのです。同時に、健康なときや順調に人生を歩んでいるときには気

づかないけれども、苦しいときにこそ生きようとする支えが見えてくると言います。

あなたたちは毎日、かけがえのない自分の人生を生きています。今日という一日は、あってもなくてもいい一日ではありません。今日という日は、これまでに亡くなっていった数えきれないほどの人が、なんとかして生きたかった時間です。生きる支えとなった大切な人たちと1秒でも長く生きたかった時間です。あなたたちの今、そしてこの先にあるそうした時間をどう生きるか、それが今日、私があなたたちに伝える最後のメッセージであり、課題でもあります。

卒業生の保護者の皆様に申し上げます。お子様のご卒業、そして今日までの12年間のご成長、誠におめでとうございませす。心よりお祝い申し上げます。この小学校での6年間、親として苦勞した分だけ成長した子どもたちのはずです。今も、心の拠り所として家族に支えを求めているはずです。この先まだまだ幾多の試練を乗り越えなくてはならない子どもたちです。どうか、今後も、家族としての絆を一層強め、さらなる自律への歩みの足元を照らす暖かな灯火として、見守ってくださるようお願い申し上げます。

卒業生の皆さん、あなたたちのいのちは自分自身で完結できるものではありません。家族をはじめたくさんのいのちに養われているのです。誰かに支えられ、誰かから補われ、誰かから受け継いでいくものです。たくさんのいのちのバトンを受け継いで、今自分の番を生きているのです。

最後になりますが、春になると浮かんでくる私の好きな句があります。

生かざるる いのち尊し けさの春

今日ここにあるかけがえのないあなたたちのいのちが、たくさんのいのちに支えられ、これからも光り続けることをお祈りしまして、式辞といたします。

令和7年3月19日

長久手市立長久手小学校長 森田 浩基